

# 大学生の国語国文学の教養の現状

山口大学 西 脇 良 三

ただ今、大阪市立大学の塚原先生のお話がございましたので、学生の実状については、相当詳しい具体例を挙げてのお話がありましたので、私はもう、ざっと抽象的な、私の見るところによるとどういふふうに若い世代はなっているだろうか、この若い世代の問題点を克服するにはどうしたらいいかということ、学生の問題とからめながら、主に教育者・研究者という立場から問題を提出してみたいと思いません。

大学生の教養の現状がどうかという、まず最初の問題ですが、先ほど塚原先生からいろいろお話がございました。私もだいたい同感であります。大阪市立大学は秀才が集まっておるかと思っておりましたが、そうでもないようで、これはやはり頭の程度の問題ということではなくて、私の見るところでは、今日の世代状況、機械主義万能の世間の嵐というもの、今日大学の状況、こういう世代状況が大学生並びに大学に来ている学生大衆ともいへば人々の頭ないし生きる姿勢というものに、重大な影響を与えているというふうには私は考えるわけでありませう。何が彼らをそうさせたかとい

うことは、一応おきまして、学生の状況は確かに国文学というものには非常に無関心でありますし、ある者は、非常に無知でもあるわけです。国文学という我が日本民族の作ったところのその文学に対して、あまり、情熱というものが、近ごろの若い人にはないようですね。ただ冷やかな知識として、ダイジェスト的な解説には耳を傾けていても、自分の肌でこれを探りあてるとか、体感し共鳴するということは、あまりないようです。このへん、私も少し年が寄ったらしく、わからないところもあるのですが、だいたい祭しはつくわけです。私の子どもなんかのことは見ていますと、女の子も男の子もだいたいやはり共通に、そういうその範疇にはいるようです。したがって同じ国文学と申しましても、とくに古典との間の断絶がきびしいということも事実であります。

明治・大正の文学は近代だと私は考えておりましたところ、この人たちにとっては、これは決して近代ではないらしいんで、二葉亭四迷というおじさんは、あまりご存知ないで、うちの学生には「ニョーテイシメイ」と読むのがだいぶんどおります。森鷗外はもとに読むんじゃないかと思っておりましたら、これは「リンオーガイ」、支那人じゃないんですかと、一般教養では言いかねない者がおるんであります。そうなる、これは非常にものがむずかしくなってきました。明治から日本の近代が始まったというふうなことを、どこかの学者が言ったんですが、この説はおかしいという反論

もむろんあるわけなんですが、明治・大正・昭和と今日まで  
続いているところの日本の近代文学史というものを、もう一  
度根本的に考え直さなくてはならない。さらには、古典との  
断絶を埋めながら日本の民族の文学というものを、日本の國  
民文学というものを、いったいどういう角度から若い世代に  
ぶっつけていったらよいんだらうかという、こういう基本的  
な課題が出てくると思うんですね。こういう壁を乗り越えな  
いと若い世代が無知だとか、情熱がないとか、いくら叱って  
みても、前進がないわけです。しかし一方では、昔広島で齋  
藤清衛先生の教えを受けられた若き日の学習院教授清水文雄  
先生の啓発によって、三島由紀夫という学生が中世のあや  
かなる美に感じて、自分の文学に開眼するに至ったというゆ  
かしい話もあるわけなんです。

これは、私はやはりぶっつけ方によっては若い世代は十分  
動くのじゃないか、若い世代が墮落したというのは、あれは  
どうも非常におかしい、眉つばものだと私はつくづく感じて  
います。戦後の混乱が一とおりに去りました今日、若い世代を  
見ますと九十八%までの若い人たちは十分まじめでありまし  
て、日本の國のよさを、自分の生活に生かして充実した日々  
を送ろうとしているし、しかも、彼らの目は非常に國際的に  
なっておるので、非常にいわゆるいい線にきていると思うん  
です。

しかし、それにもかかわらず彼らの思考というものは前進

しない。今、塚原先生が正に言われたような、非常な空洞の  
部分がある。いわゆる人間不在のまま、民族性も風土性も疎  
外したまま、文学というものにぶつかっていく、これじゃ古  
典というものが出てこないどころじゃない。いったい人間の  
問題というものが出てこないわけなんです。これでは、国文  
学が亡ぶというだけじゃなくて、日本文化が、日本民族が亡  
ぶ。私は今、我々はそのせとぎわにきていると思うんです。し  
たがって、若い世代のこういう問題を克服するためには、私  
は今、研究者・教授者・国文学に身を寄せて生きている者と  
いう視野から見えていくわけなんです。こういう古くて新し  
い日本の道に対しての責任を今日までもってきた者たちがも  
う少し問題を考え直して、基本的な角度からこの國の文学と  
いうものと取り組まないと大変なことになると思うのです。  
今日、国語学界・国文学界にはやっておりますような——国  
語学のほうは、私は専門外ですから、あまり申さないことに  
いたしますが——国文学のほうにはやっておりますような、あ  
あいうわずらわしい極端に細分化された考証万能のようなこ  
とばかりやって、これが学問だ、というようなことを言って  
おりまして、若い世代にはピンとこないでしょう。こうい  
うことは、非常に瑣末主義に陥ったところの、今日の学問の  
姿というものを露呈する以外のなものでもない。私は今、  
近代をかじっている者ですから、思いがいがあったらいか  
んと思つて、いろいろな時代を専攻なさっている研究者にき



化人や学者がまだ多いとみえまして、そういう日本の民族がまさに解決しなくてはならない大切な課題というものがほったらかしになっています。ここに日本の人文諸科学の不毛性の一つの原因があるわけですが、いわゆる人間疎外の状況を克服しないままに学問というものが技術主義の論理によってあそばされて、何のためにそういう学問が今日ただ今必要なのか、その究明さるべき課題が何であるかということが、ほけたままであるということが、ままたるわけです。

これも今日の世代状況の反映なんです、技術主義万能、機械主義万能、人間疎外のそういう風潮が大学にもそのまま吹きこんでまいてりまして、今や大学の内外を問わず、人間性の危機というものが、大変な問題になっているわけです。

これはヨーロッパにおいても同じことなのですが、ヨーロッパのキリスト教文明も揺らぎ、東洋も西洋もそういう問題に対決していかななくてはならない時点にきております。

こういう大切な課題に背を向けたまま、どうも国文学の世界でも、何かこう機械的な操作がまかり通っているふしが多い。これらの事情は端的に大学生の研究態度に反映しております。さらには、広くは今日の日本人の教養一般のあり方というものに、ひとつの知的な論理として、生活から切り離された論理として、ある学説をもてあそぶという傾きがある。ある種の知識はある。しかし、それは悲しいかな、日本という風土に根づいていない。われわれの生活に根づいておらな

い。こういうことがあるるかと思うんです。

学生に対して悪い影響を与えている第二の原因は、大学の内外に巣くっておるところのわれわれ教授者・研究者そのものにあると私は考えます。われわれ先達たるべき者が、魅力的な民族の課題を鮮明にし、これを若い世代にぶっつけるという歴史的な使命を怠っている。この種の端的な例は、いろ／＼あると思うんですが、たとえば幕末に近いころ国学をやられた人たちが日本の国の学問を樹立することをとおして日本の新しい目覚めというものに培われました。この人々のなされました仕事は、非常に素朴であつたと思うんです。日本の古いことばをたずねるといふことをとおして、徹底的に古語に宿るところの古くて新しい精神、この国語を支えておるところの、支えるべき精神を尋ね求められていた。方法論は素朴であつたけれども、ちゃんとした目的意識につながり、その態度というものは、まことに堂々としたもので、三代も四代もかかって、じっくりじっくり本質的な課題を掘り上げていく。こういうことなんです。アメリカ的な点数かせぎのような変なものでは決してありません。こういう態度を思いおこさないと、大学の内外の教授者・研究者の責任はつくされないのじゃないかと私は思うわけなのです。

これで学生の問題の方は終わりました、研究者の方に話をしほって申し上げたいと思うのであります。研究者の問題として、私は戦前と比較して簡単に考えてみたいと思うのであ

りますが、先ほど学者のことを申し上げましたが、戦前においてわれわれの国文学界の元老たちは、どういう仕事をなさったか。たとえばこの大学におられました斎藤清衛先生は中

世文学が中心でございませうから、日本の中世の精神世界、精神美の世界というものを探究なさって、それをもって生涯のお仕事とお考えになった。生活の全体をかけてそういう探究というものにまっしぐらにおはいりになって、従来、文学以前というわけで、見落とされておったところのいろいろの文献、文物、制度というものを広い視野から調べられ、日本の精神美を支えるところのものをつぎつぎと焦点化して発掘されていった。さらに岡崎義恵先生は、日本の文芸美というものに焦点をあてられ、文芸学の立場から世界文芸との対比においてその特質を明らかにされていったのである。片岡先生以下の歴史社会学派の方は今まで国文学とは隔絶していたところの歴史学、その他社会学諸科学の業績というものと握手をしなから、新しい社会基盤から日本の民族の文学というものを開拓されていったのである。津田左右吉先生のなさったお仕事については、今ははぶくといたしまして、このような戦前著名であったところの、われわれが若い日に見聞し、啓発されたところの三人の著名な研究者が、それぞれおやりになった仕事というものは、いずれも共通点があると思うんです。それは自分の課題を樹立することにおいて、まことに旗幟鮮明であったということ。さらにはそれがまさにその時代

が担うべき課題にピシャッと焦点化されていて、まさに国に柱たるべき学者が担うべき課題としてちゃんと定着されていたということが一つ。

二番目はその課題を追究なさるに際して、まことに斬新な方法論を導入されたという問題です。従来、人が見落としていた新しい隣接諸科学、新しい方法論をどんどん導入されまして古い国文学者の研究態度をはるかに抜け出たところの研究をどんどんお進めになった。これは、このお三人だけではありませんでして、日本の国文学を進めるために、たとえば、民俗学というふうなものが、どのように貢献したか、あるいは国学以来の上代文学研究を進めるために明治時代の研究者がどのような方法を駆使されたか、哲学といわず宗教学といわず、神話学といわず、人類学といわず、歴史学といわず、あらゆるものが導入されてその古い典籍の真実を究めるために、それに光を当てるためにあらゆる方法が駆使されてきたわけです。こういうふうの一つの課題が提出され、やがて究明される課題が定着すると、おのずからいろいろ新しい角度から問題が掘り下げられる。特に戦後は、埋もれていた民間資料が新しく陽の目を見たという非常に有利なデータもあるわけなんですから、そういうものを編み上げていく卓抜な方法論というものが出てきさえすれば、この国文学が背負っているところの今日的な課題に答えることができるんではないか。こういうふうには私は思うわけなんです。

そのためには最初申し上げたように、どの學問も非常に専門化されてきまして、限られた個人の方ではなかなか深く、広くというわけにはいきません。そこでやむをえず蕪村をやる人は蕪村だけ、芭蕉をやる人は芭蕉だけ、こういうことにならざるをえない悲しさがあるわけなんです。そこで当然これは、自然科学でもそういうふうにおやりになっていま

すし、他の諸科学でもそういうふうにおやりになっているわけなんです、若い大学院の学生も含めまして、若い世代を中心としましたところの、それに老大家にもおはいりいただいて、共同研究のグループというものを作らなくちゃならない。これは、よその国では文学研究についての相当広い着実な、長時間の仕事ができてるようですが、そういうものを作らなくてはなりません。日本の今の状況では国文学で申しまして、古典文学をやっている人と近代文学をやっている人との間にも共同動作がない。こんなことでは、やはり評論家の方がはるかに視野が広く、確かな見通しのもとにものを言うということになりがちなわけなんです。山本健吉氏の方がズバツとしたことを言う。こういうことに当然なってくるんであります。国文学者と国語学者の間にも、あまり基本的な共同動作がなされない。さらには、古典をやって同じ時代をつづいている人たちの間もバラバラ、いわんや他の諸科学者との共同研究というようなもの、日文協あたりでは少しおやりになっておるようですが、なかなか前進しないわけ

です。こういうことがやはり基本的にそれぞれの大学においても考えられて、私は何も昔日本にあった国民精神研究所を復活しろと言うわけではありませんが、こういう国民の文化、国民の文学を研究するための組織をつくる必要があると考えるわけです。

アジア文化、アジア問題の研究もけっこうですが、日本の文化・文学をめぐるところの諸問題を広範な角度から究めるところの共同の研究室・研究所というものが、それぞれ各大学にも、中央にも樹立されて、有能な人が、それぞれ持てる力をフルに組み合わせていけるような、そういう組織を作らなくちゃならんと思うのです。それに若い世代のエネルギというものを惜しみなく導入して縦横に研究させる。そういうことになって初めて、他の人文諸科学・社会諸科学、さらには自然科学が今日以後に樹立するであろうような成果に追いつくような研究上の厚みが期待できるし、さらには今日の若い世代が要求し、期待しているような高次な課題が少しずつ鮮明にされてくるんじゃないか。私は、このように思うわけです。

非常にはしよった抽象的なことばかり申しましたが、私の考えておることの一端がおわかりいただけたら望外の幸いです。